

原田宿(1)



▲原田宿東講口付近のようすを描いたさし絵。(『田嶋外伝浜千鳥』より)

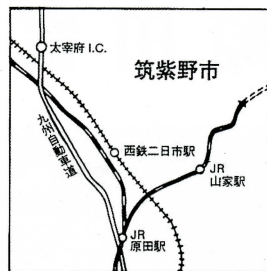
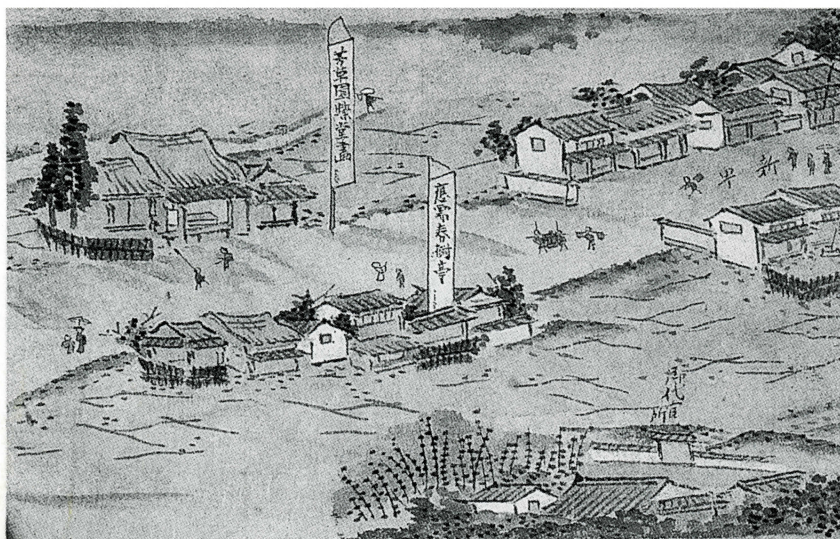
筑前六宿のひとつ原田宿は、筑後・肥前と接した国境の宿場です。

原田宿がいつできたのか、正確にはわかりませんが、『黒田家譜』には寛永15年(1638)1月1日に島原の乱を鎮圧するために冷水峠を越えてやってきた松平信綱の一行50騎1300人あまりの軍勢が原田に宿泊したことが記録されていますので、この時にはすでに宿場ができていたものと考えられます。

原田宿の初代代官は小河内蔵允で、天拝山の植林でも知られる人です。代官所は現在の郵便局の裏手にある“お屋敷山”と呼ばれる小高い丘の上にあります。



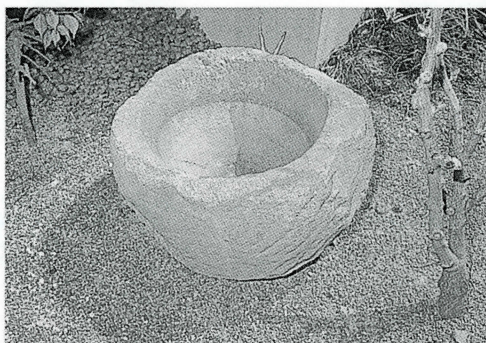
▲中央高台が代官所跡(1988年撮影)



◀東構口付近。右下に代官所
がみえる。また、構口左横
の店は原田名物の「腹太餅
屋」。三国峠をこえるため
に腹ごしらえした。写真下
は、その餅をついたという
石臼。伯東寺に保存されて
いる。



◀筑紫神社入口にあ
る追分石。「天満
宮参詣道」とある。



◀関番所跡に立つ「原田宿場跡」の碑

文化9年(1812)9月25日、日本全体の正確な地図をつくるために全国測量の旅を続けている伊能忠敬の測量隊が、南の田代宿(現佐賀県鳥栖市)から北上して原田宿にやってきたときの『測量日記』には、宿場に入ってすぐ右に「口留番所」(通行手形を調べる所で関番所ともいう)、その次に「町茶屋」があり、「町役人宇右衛門」の家に小休みしたこと、つづいて右側に「問屋」(旅行者に馬やかごの世話をする所)、左側に「制札所」

(幕府や藩の法令を掲示する所)があったこと、さらに進んで博多道と長崎街道の追分に出ると正面に筑紫大明神の鎮守の森があるというようなことがしるされています。

また、安政5年(1858)に山内陽亭という原田出身の学者が書いた小説「田嶋外伝浜千鳥」には「原田駅家の真景」というさし絵があり、江戸時代の原田宿のようすがよくわかります。